



友人竹田侑子さんが送ってくれた『弘前市史』の資料は、1614年に流刑となったキリシタンの様子を、1624年まで10年間、毎年のように訪れた宣教師によっても知ることができると記しています。3人の名を挙げて記録しています。宣教師ジェロニモ・アンジェリス（左：想像図）、パードレ結城ディオゴと、レオン・パジェス（1814-1886）の著書『日本切支丹宗門史』の記録を採用しています。『日本キリシタン殉教史』（片山弥吉著）によれば、ディエゴ・デ・カルウァアリヨも何度も訪問しています。

流刑者は5つの「団」に分けられ、組頭を定め、仕事をしていました。「団」の一つは高岡（弘前）にあったが、ほかは不明。元和3年（1617）流刑者の薬師ショアン・マチアスがレオ・ドーティとマリア夫妻を改宗させ、流人のレオ・ジョースンが弟子のミカエル・ニヒョーエを改宗させたことで、津軽では初めての火刑により殉教したとあります。

寛永年間（1624-43）の記録によれば、流刑者は新田開発、鉱山採掘に従事しています。寛永2年（1624）にトマス・スケザエモンが若者を洗礼に導き火刑。3年にはイグナチオ・モザエモンら11名が死罪。14年の「島原の乱」以降、取締まりが厳重になり、15年には73人が火刑。20年に伊勢の五左衛門が火刑。弾圧が徹底した津軽には彼らを慰霊するものは全くありません。

もう一つは「隠れキリシタン」の足跡に付いてのインターネットの資料を頂きました。彼女自身、足を伸ばした場所もあります。『日本キリシタン殉教史』（片山弥吉著）によれば、**1625年に奥羽と出羽では迫害の最中でありながら278人の人々がキリシタンになった**、と記されています。また、弘前教会の「高札委員」の方の教会誌の記事によれば、**津軽では平賀、大光寺（現・平川市）の切支丹人別帳に3,000人を超える信徒が記されました**、とあります。流刑者を慕って来た人、または逃亡してきたキリシタン、新たに信徒になった領民でしょうか。かなりの数です。彼らは津軽の近隣の鉱山に逃げ込んだり、人里離れた山奥に隠れ住んだようです。鉱山は「山法」という一種の治外法権的な場所であったとのこと。



津軽では白神山地の尾太岳（おっぶだけ・標高1083.4m）に尾太鉱山がありました。そこが隠れキリシタンの安住の地になったという伝説が残されています。けれども遺跡は確認されていません。

一方、出羽（秋田県）の鹿角市には尾去沢鉱山があり、ここでは寛永20年（1643）多くの信者が捕らえられ、処刑されたといわれます。この坑道の一部に信者が壁に刻んだ十字架が今も残されています。

秋田県の湯沢市には北向観音とキリシタン慰霊之碑があり、処刑された寺沢村のキリシタン16名を慰霊しています。また、寛永元年（1623）院内銀山で25名、善知鳥鉱山で13名が斬首、寛永20年（1643）には多くの信者が捕らえられ、処刑されたと記録しています。津軽では取り締まりが厳しかったためか、キリシタンは蝦夷へも逃げています。

北海道福島町の大沢、千軒の金山では寛永16年（1639）キリシタン砂金堀男女106名が処刑されました。多くの人々は逃亡したようですが、それから5年後の1644年の記録にもその金山でキリシタンが捕まり、江戸送りになっています。そのことから多数のキリシタンが鉱山には隠れ住んでいたのでしょう。



多くのキリシタンが棄教せず、殉教しました。無関心だったことを恥じます。無惨な死に耐えられない思いがすると同時に、信仰の強さに驚きます。彼らの信仰を知りたいと思います。